保健室登校の高校生の時間的展望の特徴

―― 心理的時間と精神的健康 ――

和　田　万　紀

はじめに

日本の保健室登校の高校生の精神的健康支援が，喫緊の課題と指摘されている（文部科学省，2023）。本論では，保健室登校の高校生を対象として，その時間的展望の特徴を明らかにして，その特徴から保健室登校の高校生の心理的時間と精神的健康に関する考察を試みること目的とする。

その際に時間的展望の測定には，過去，現在，未来を表す３つの円を描画することで時間的展望を表現して評価するサークル・テスト（Cottle, 1967）を行う。そしてサークル・テストの評価に際して，描かれた３つの円の面積，周長，位置などの定量的解析を行い，検討することとする。

時間的展望とその測定

第１節　時間的展望とは

心理的な時間の概念や定義は多岐にわたる。特に「時間」を対象とする研究においては，必ずしも同一の対象として時間研究がなされているとは言えない現状があり，松田・調枝（1996）は，心理的時間には多様性と複雑性が存在することを指摘している。その中で，心理的時間の複雑性を示す時間的展望がある。時間的展望（time perspective）とは，ある一定の時点における個人の心理

学的過去及び未来についての見解の総体（クルト・レヴィン著，1942 末永（訳）1966, p.134-164.: 1943 猪俣（訳）1979, p.65-66.）と定義される。

また時間的展望は，主観的に捉えられた過去，現在，未来という時間の流れを意識することで構築される一方で，過去，現在，未来を区切り，現在との関連でそれらの時間を位置づけることによっても構築される。この点について白井（1996, p.384-386）は，時間的展望においては，時間が過去から現在，未来という特定の３つの時間として特定方向へ流れる一方で，それらの３つの時間の関連性が時間的展望に示されるという。そして白井（1996）は，それが時間的展望の複雑性となり，しかし同時に，この様に時間を意識することが自己の存在を意識することにつながる，と指摘している。

時間的展望は，その構造や内容の特徴を示す認知的側面だけではなく，個人の感情や動機づけ，行動などにも影響する機能的な側面も含んでいる（白井，1995）。例えば勝俣（1995）は，時間的展望における機能的側面について，自己に対する過去へのフィードバックシステムと未来へのフィードフォワードシステムを持つことを指摘した。機能的側面のこの２つのシステムは，相補的関係にあり（勝俣，1995, p.311），フィードバックは過去展望へ，フィードフォワードは未来展望へ適用されて，両機能ともにそれぞれ自己に対して肯定的及び否定的な両方の影響を与えることが指摘されている（勝俣，1995）。さらに，時間的展望の主に機能的側面は，そのフィードバックシステムによって，個人の適応的行動にまで影響することを示している（勝俣，1995, p.315）。

千島（2021）は時間的展望を，感情や動機づけを通して行動に影響する機能を持つ心理的特性の１つとしている。小塩（2021）は，その心理的特性が「良い結果」をもたらすことと，変容可能性を備えていることを指摘した（小塩，2021, p.253）。小塩（2021）は，心理的特性の１つとしての時間的展望を非認知能力の１つと位置づけている。非認知能力とは，「何かの課題に対して懸命に取り組み，限られた時間の中でできるだけ多く，より複雑に，より正確に物事を処理することができるといった心理的な機能ではないもの，または思考や感情や行動について個人が持つパターンのようなもの」（p.2, l. 9-12.）と定義した。

そして小塩（2021）は，この様な非認知能力は，「「良い結果（学力や健康，幸福，社会的活動など）」へとつながる心理特性であること，教育や訓練によって伸ばすことができる心理特性であること」（p.9, l.4-6.）という条件を満たすことが重要であるという[1]。時間的展望を「良い結果をもたらして変容可能な心理的特性」（千島，2021）として非認知能力の１つと位置付けるならば，前述した時間的展望の認知的側面と機能的側面とを合わせて，時間的展望を通して精神的健康と適応的行動を導く可能性を示唆することになる（和田，2019, p.18）。

第２節　時間的展望の測定　―サークル・テスト（Cottle, 1967）を中心に―

時間的展望の測定方法には，時間的展望の定義や焦点を当てる側面によって

1　高等学校学習指導要領（平成30年告示），第１章総則より「育成を目指す資質・能力（第１定款３）」に以下の点が示されている。

①　高等学校教育の基本と教育課程の役割（第１章総則第１款）

従前，「教育課程編成の一般方針」として規定していた内容を再整理し，教育課程編成の原則（第１章総則第１款１）を示すとともに，生徒に生きる力（確かな学力，豊かな心，健やかな体）を育む各学校の特色ある教育活動の展開（第１章総則第１款２），育成を目指す資質・能力（第１章総則第１款３），就業やボランティアに関わる体験的な学習の指導（第１章総則第１款４），カリキュラム・マネジメントの充実（第１章総則第１款５）について示している。

そして，「育成を示す脂質・能力（第１章総則１款３）」には，

３　豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に，生きる力を育むことを目指すに当たっては，学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら，教育活動の充実を図るものとする。その際，生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ，次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

⑴　知識及び技能が習得されるようにすること。

⑵　思考力，判断力，表現力等を育成すること。

⑶　学びに向かう力，人間性等を涵養すること。

（https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf　2024年８月12日閲覧）

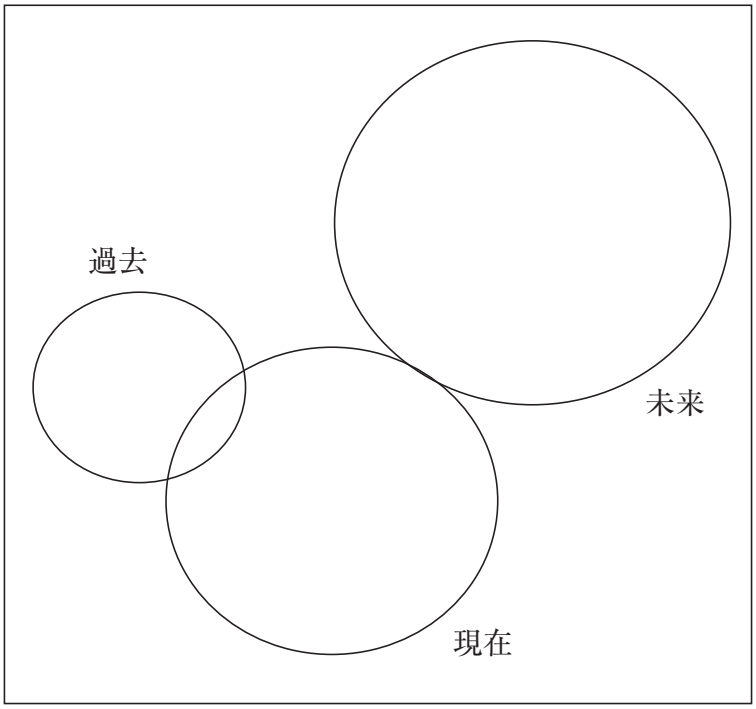
と記述されている。この中でも特に「⑶　学びに向かう力，人間性等を涵養すること」に「非認知能力」が相当して，その教育的な支援の指標の１つに時間的展望を定めることができると小塩（2021）は主張している。

多くの尺度が開発されて使用されている（例，都築，1982：千島，2021：Mohammed & Marhefka. 2020）。例えば，時間的態度に焦点をあてた白井（1994）の時間的展望体験尺度がある。白井（1994, 1996）によると，時間的態度とは時間的展望の中に含まれる概念の１つであり，「過去・現在・未来に対する感情的評価，あるいは，将来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価の総体」としている。白井（1994）のこの尺度は，過去受容，現在の充実感，希望，目標指向性，の４つの下位尺度から構成され，合計18項目の質問項目から構成されている。一方，日本語による質問から構成される尺度であるため，言語や社会，文化の多様性の中での実施は難しくなる。

時間的展望の測定で言語を使用しない投影的方法として，Cottle（1967）はライン・テスト[2]やサークル・テストを提案している。その中でサークル・テストは，個人の主観的な時間が過去，現在，未来をそれぞれ表す３つの円で描画できると仮定して，白紙にこの３つの時間を表す３つの円を自由に描くものである（Fig.1）。その評価は，３つの時間を示す３つの円の視覚的な特徴を指標として行う。例えば，３つの時間を表す３つの円の大きさやそれぞれの円の重なり等が指標となる。この様な３つの円の視覚的特徴を指標とする評価は，過去，現在，未来という時間を区切られた時間として個別に評価するだけではなく，３つの時間を包括的に捉えて，その関係性から時間的展望の特徴を評価することになる。

2 ライン・テストは，限定された長さの直線上に，自分の誕生・過去と現在の境界・現在と未来の境界・自分の死，の出来事について，各時間の重みづけを時間の区切りの間隔として相対的に示すものである。言語を使用しない投影的方法となる。

Fig.1　サークル・テストの例　（著者作成）



３つの円の大きさや重なり等を指標にして評価する。なお本研究では円の面積，周長，中心点座標，中心点間距離を計算して評価する。

そして評価には，描かれた３つの円の中で最も大きい円を示す時間から，時間的優位性（Temporal Dominance）を，各円の重なりの有無や重なる時間から，時間的関連性（Time Relatedness）を，円の大きさの順番が時間の重要性を示す時間的発展性（Temporal Development）[3 4]等から，各自の時間的展望の特徴を数値化する。この様な言語を使用せず投影的方法によって時間的展望を評価することで，多様性のある対象について時間的展望の測定を可能にする利点を持つ

3　過去，現在，未来の重要性についての順序づけられた方向性を示しており，価値観に基づくものである（白井，1996, p.389）。
白井利明（1996）．第７章　第１節　時間的展望とは何か　松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編　心理的時間　北大路書房，p.377-442.

4　白井（1995）．では，時間的指向性（time orientation）と示されており，時間的展望，時間的態度から区別される，と述べている（p.199）。
白井利明（1995）．時間的展望と動機づけ ―未来が行動を動機づけるのか―　心理学評論　38, 2, p.194-213.

ことになる（例，Wada, 2021）。

園田（2011）は，このサークル・テストを基本にして，過去，現在，未来の各時間と自己概念との関係を言語で記述して，それらの関係を明確化するという展望地図法を開発した。それは，サークル・テストで示される過去，現在，未来の各時間に関連づけて自己概念を記述し，３つの時間と自己概念がどのように関連付けられるのかを図示して明らかにするものである[5]。この展望地図法は，自己概念の中での時間のまとまりを１つの「概念」と定義して，自己概念のなかの時間のまとまりを「概念地図」として視覚的に表すことになる。

園田（2011）は，「自己と時間の概念地図」を描くことが，「過去，現在，未来の時間に関わる自己を物語る取り組みとなり，自己再構成にもつながる」（p.23）という。この様に展望地図法を実施すること自体が，その過程において「自己と時間との関係を意識化させる」ことになる。そしてその意識化によって，時間的展望の過去展望へのフィードバック機能と同時に未来展望へのフィードフォワード機能が働き，「自己再構成」として自己変容[6]をも可能にすることが示される。

第３節　サークル・テストの定量的解析

サークル・テストの視覚的特徴の指標から時間的展望の特徴を評価することに加えて，Shigemune et al.,（2021）は，サークル・テストに描かれた３つの円の面積について画像解析を行い，脳腫瘍の患者と健康な大人の時間的展望の

5 園田（2011, p.22）によると，まず「自己概念に関する命題」を過去，現在，未来の３時間で表現することが求められる。その手続きは，自己概念を直接表現する方法の１つである「20答法」を応用したものである。つまり，「過去の私は」「現在の私は」「（現在からみた）未来の私は」のそれぞれから始まる文章を，自分を表現する単語や短文を記述して完成させる。そしてその完成した「自己概念」に関する文章を，３つの各時間の「自己概念に関する命題」とする。次にそれらの文章を，各文章同士が有意味な関係を持つように空間的に配列して図示し，そのつながりや関係について記述する。

6 「命題としての自己概念」以外に「主体としての自己」及び「対象としての自己」も含むものとする。

特徴を検討すると同時に，時間的展望を介した精神的健康の支援策を明らかにしている。

まず，脳腫瘍で鬱状態または鬱ではない状態の患者の手術の前後と，健康で鬱ではない大人の参加者に対して，サークル・テストを実施して，従来の知覚的特徴を指標とする時間的展望の特徴を評価した。サークル・テストの結果は，描かれた３つの円についての時間的優位性と時間的関連性の指標から，過去，現在，未来の３つの時間の視覚的特徴が，脳腫瘍鬱群，脳腫瘍非鬱群，健康な参加者群，及び，脳腫瘍群の手術前後という条件間で比較された。なお健康な参加者は，脳腫瘍鬱群と脳腫瘍非鬱群の手術前後と同時期にサークル・テストを２回行った。その結果，従来の視覚的特徴の時間的優位性と時間的関連性には，群間での統計学的有意差は認められなかった。

次に Shigemune et al.,（2021）は，サークル・テストの３つの円について，生物画像解析に使用される画像解析ソフト ImageJ（三浦・塚田，2016）を用いて，円の面積等の画像解析を行った。そして３つの円のそれぞれの面積，３つの円の面積全体に対する各円の面積との比率等を求めた。その結果，３つの円の各面積の差に，過去，現在，未来という３つの時間，鬱群，非鬱群，健康な参加者，及び手術前後，の各要因について統計学的に有意な主効果が認められた。鬱群は非鬱群よりも３円の全体の面積が小さく，過去の円の面積が現在と未来の円の面積よりも大きく，手術前の面積全体は手術後の面積全体よりも小さかった。また過去と未来の面積の比率は，鬱群が非鬱群よりも過去の比率が大きいことが明らかになった。

Shigemune et.al.,（2021）は，サークル・テストの従来の視覚的特徴の指標以外に，３つの円の面積を指標として時間的展望を検討することで，次の点を明らかにした。

第１に，脳腫瘍で鬱状態を改善するために，時間的展望の未来展望を肯定的に促すための支援が有効である。これは，時間的展望の機能のフィードフォワード機能を利用して未来展望をより肯定的に捉えられるような支援が，精神的健康の促進に寄与することを示している。

第２は，サークル・テストの３つの円の面積の画像解析[7]によって，従来の視覚的特徴の指標による評価だけでは認められなかった新たな知見が明らかにされたことである。つまりサークル・テストの３つの円に関する定量的分析の有効性が示された。

保健室登校の高校生の時間的展望と精神的健康

第１節　高校生活への適応促進要因

和田・小野村・須永（2023），小野村・須永・和田（2024）は，新高校１年生を対象にして，時間的展望と精神的健康との関係について，登校回避感情（鈴木，2017）や自尊感情，心身のストレス反応等の要因間の関係性について検討した。

高校入学時には，中学生の時には未来である高校生としての自分が現在に，中学生としての自分が過去になることで，時間的展望の再構築が必要とされる（都筑，2009）。そこで和田・小野村・須永（2023）と小野村・須永・和田（2024）は，まず高校新１年生について，中学の登校傾向の差が高校生活への適応要因に与える影響を検討した。その結果，中学での登校に困難が無い群では，現在展望と感情ストレス反応が登校回避感情に直接影響した。中学では困難なく登校可能でも，高校入学時に現在展望が否定的で感情ストレス反応が高いと，登校回避感情が高まり，高校への適応困難が予想される。一方，高校入学時の現在展望は，肯定的過去展望が自尊感情を介することで現在展望に影響し，否定的過去展望が感情ストレス反応を介して現在展望に影響していた。過去をより肯定的に受け入れることが自尊感情を高揚させ，現在展望を肯定的にできるこ

7　Yabe and Yamada（2023）は，過去，現在，未来の３つの時間を３次元空間上に球体で表現して，その画像解析を行い時間的展望について考察している。
Yabe, Y. and Yamada, S.（2023）. A pilot study of how the past, present, and future are represented in three – dimensional space. Frontiers in Psychology, Volume 14 – 2023. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2023.1071917

とになり，過去を否定的に展望すると感情ストレスの高まりから現在展望が否定的になることが示された。学校移行期に新たな時間的展望の構築が求められる時，過去を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかが，自尊感情や感情ストレス反応を介して，現在展望に影響して，その結果形成される現在展望が否定的であるほど，登校回避感情が高まることが示された。高校生活を始める際の新たな時間的展望の構築には，過去を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかという過去展望が，高校生活への適応に影響することを明らかにした。

伊藤（2013）は，高校生を対象にして，中学で不登校を経験したことを肯定的に捉える群，否定的に捉える群，どちらでもない群，不登校経験のない群間で，時間的展望，自尊感情，中学の学校適応等を比較している。その結果，高校生となった現在，中学での不登校を肯定的に捉えると，つまり肯定的過去展望を持つと，現在の自尊感情が高く，将来への自信を持ち，肯定的現在展望から肯定的未来展望を形成できることを示している。そして時間的展望の構築には，過去を肯定的に捉えられるか否かは重要であり，肯定的過去展望が現在の自尊感情を高めて，過去の不登校を肯定的に捉えなおす傾向が強くなるというスパイラルな関係を明らかにした（伊藤，2013, p.27）。

山本（2008）は，高校生の不登校の経過，回復過程の事例について，時間的展望の変化から検討している。そしてその回復過程では次の様な時間的展望の変化が起きるという。それは，「今日登校できるかどうかということが全てとならざるをえない否定的な現在指向，不登校を避けることができない，または改善の機会を逃してしまったことの後悔が生じる否定的過去指向，未来への不安とそれに対処ができない否定的な未来指向，過去や未来を自身で扱える単位に置き換えて各時間の関連性を意識して課題解決に取り組もうとする肯定的な現在指向と肯定的な未来指向を回復する時期」（山本，2008, p.300）を経るという。

さらに不登校からの回復過程での時間的展望の転換時には，「過去や未来への展望が広がることで，逆に葛藤が生じること，その葛藤の克服と自分を取り巻く環境や課題を直視すること，そしてそれを支援する家族や援助者の支援が，時間的展望の変化の契機となること」（山本，2008, p.300）を指摘している。和

田・小野村・須永（2023）や小野村・須永・和田（2024）が指摘する様に，高校入学という学校移行期に時間的展望の再構築が求められる時に，山本（2008）の指摘する様に，過去や未来への展望の拡がり，振り返り，見通しをすることが，逆に葛藤を生じさせて，それが不適応を生じさせることが示唆される。

第２節　保健室登校の高校生の時間的展望

小野村・須永・和田（2024）は，高校での教室登校群の中で中学の登校傾向の差による２群と，高校での保健室登校の１群とについて，時間的展望，自尊感情，登校回避感情，ストレス反応等の差を検討した。なお時間的展望は否定的過去展望，肯定的過去展望，現在展望，未来展望について，質問紙による回答から評価している。その結果，高校の保健室登校群は，現在展望が他の群よりも否定的であった。しかし過去展望と未来展望は，他の群との差はなかった。高校の保健室登校群が，過去展望と未来展望において，高校での教室登校群との間に差が認められないことは重要である。

サークル・テストの定量的解析による時間的展望の検討

第１節　目的

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について，サークル・テストを行い，描かれた３つの円の画像分析による定量的な検討を行う。

和田・小野村・須永（2024）は，保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望を，サークル・テストの従来の指標である視覚的特徴を指標として検討した。その結果，保健室登校群は，過去，現在，未来を表す３つの円の視覚的特徴として，３つの時間を示す３つの円をそれぞれ個別に，またいずれも交わりが無く描いた。しかし教室登校群は，３つの円のいずれかに交差を描いた。つまり保健室登校群は，過去，現在，未来の間に時間的な関連性が円の描き方には示されず，教室登校群は円の描き方において関連性が示された。

また時間的優位性については，保健室登校群と教室登校群との差がなく，両群共に各群の半数が未来を最大円として描くことが示された。保健室登校群は，時間的優位性には教室登校群と差が無いが，過去現在未来の３時間の時間的関連性が認められず，各時間を切り離してとらえていることが特徴であることを明らかにした。

この結果を小野村・須永・和田（2024）の結果と総合すると，保健室登校群の時間的展望は，過去，現在，未来を関連づけながら統合せず，それぞれの時間を単独に捉えており，否定的な現在展望の中にある，といえよう。

そこで，保健室登校群と教室登校群のサークル・テストに描かれた３つの円について，面積や周長等の画像解析を行い，保健室登校群の時間的展望の特徴をさらに検討する。

第２節　方法

調査対象と倫理審査

2022年４月から12月にＸ高等学校保健室登校群８名と教室登校群25名を対象に調査を行った。日本大学大学院総合社会情報研究科倫理委員会（承認番号HP21S008），また高等学校，教育委員会の承諾を得た。さらに保護者と本人の両方の承諾書を得た場合のみを，分析対象とした。

手続き

縦横各16cmの枠組みが描かれたＡ４版白紙を各自に配布して，自分自身の過去，現在，未来を表す３つの円を枠組みの中に自由に描くように教示した（Fig.1参照）。枠組みの正面左上を原点にして，直交する横軸と縦軸を設定した。横軸は，原点から右方向に正の目盛り（cm）を，また縦軸は，原点から下方向に正の目盛り（cm）を設定した。なおこの２軸の目盛りは，調査の際には描かれていない用紙を配布して，記述を求めた。そして描かれた３つの各円について，この枠組みの中での縦横の位置から，各円について中心点座標，面積，周長をImageJで計算した（National institutes of health, Bethesda, MD. USA; https://

imagej.nih.gov/ij/: 三浦・塚田，2016)[8]。統計解析には，SAS 9.4と R2.2を使用した。

第3節　結果と考察

Table 1に，サークル・テストの3つの円についての画像解析の結果，円の面積，円の中心点座標，周長の平均値と標準偏差を示した。そして各円の面積，各円の中心点座標，周長について，保健室登校群と教室登校群との間での t 検定を行った。しかしいずれの指標も，両群間に有意差はなかった。なお，現在を示す円の縦軸中心座標に，両群間の傾向差が見られた。

次に3つの円の面積比について，Table 2に，サークル・テストで円の重なりが描かれた教室登校群のみの重なりの面積，中心座標，周長の平均値と標準偏差を示す。なお保健室登校群は，過去と現在の重なりを描いた1名を除いて，3つの円のそれぞれの重なりを描いた人数は0人であった。従って各円の重なりの面積の平均値と標準偏差は0となり，変動は無い。

次に，Table 3に，保健室登校群と教室登校群について，3つの円全体の面積に対する各円の面積の比率と，各時間同士の円の面積の比率の平均値と標準偏差を示した。教室登校群の円の面積の比率の平均値と標準偏差が大きいために，中央値に対してマン・ホイットニーの U 検定を行った。その結果，いずれの面積比においても，両群間に有意差はなかった。

また両群間での円の書き方の差を検討するために，各時間における円の面積の分散にレビン検定を行った。しかし両群間に各円の面積の分散の有意差はなかった（過去 F=.339, p=.565: 現在 F=.252, p=.619: 未来 F=1.470, p=.235）。

Table 4に，保健室登校群と教室登校群の3円の中心点間距離の平均値，標準偏差，t 検定の結果を示す。過去と現在の円の中心点間距離に，両群間に有意差が認められた。保健室登校群は教室登校群よりも，過去と現在の円をより離して描いた。

8　サークル・テストの画像解析に際して，濱田淳子氏の協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

Table 1　3 円の面積（cm²），横・縦中心座標（cm），周長の平均値，標準偏差，*t* 検定

		過去				現在				未来			
		面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長
保健室登校群	*M*	12.83	4.34	7.26	11.78	13.56	7.72	8.65	12.56	22.43	9.62	7.44	15.07
8 名	*SD*	14.08	1.77	3.46	7.91	12.73	2.21	1.86	6.75	23.22	2.46	3.26	11.00
教室登校群	*M*	17.17	4.77	6.53	13.24	17.63	7.02	6.96	14.00	39.96	9.66	7.19	19.24
25名	*SD*	22.46	2.10	3.01	8.87	18.02	2.52	2.27	7.56	58.45	2.28	1.83	14.46
	t 値（*df*＝31）	−.51	−.52	.58	−.42	−.59	.71	1.91	−.48	−.82	−.05	.28	−.75
	p 値	.612	.610	.567	.680	.559	.486	.065	.635	.418	.963	.785	.461
	効果量 *d*	−.21	−.21	.24	−.17	−.24	.29	.78	−.20	−.33	−.02	.11	−.30

Table 2　教室登校群の 3 円の重なりの面積，中心座標，周長の平均値と標準偏差

（注）中心座標は直交座標の原点からの距離（cm）面積（cm²）

		過去現在の重なり				過去未来の重なり				現在未来の重なり				過去現在未来の重なり			
		面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長
教室登校群	*M*	2.98	3.94	4.21	4.41	2.15	2.52	2.17	2.28	1.09	5.58	4.72	3.38	.28	1.96	1.61	.86
25名	*SD*	7.51	3.58	3.64	5.30	8.64	4.01	3.31	5.68	1.39	4.20	3.51	3.08	.76	3.78	3.00	1.84

Table 3　円の面積比の中央値とマン・ホイットニーの検定

	円の合計面積に対する各円の面積の比率			2 つの円の面積の比率		
	過去 / 合計	現在 / 合計	未来 / 合計	過去／現在	未来 / 現在	未来 / 過去
保健室登校群 8 名	.305	.283	.319	1.405	1.275	1.470
教室登校群25名	.158	.292	.369	.630	.930	1.910
U	113.000	102.000	88.000	111.000	106.000	85.000
P 値	.606	.951	.636	.659	.817	.542

Table 4　各円の中心点座標間の距離（cm）の平均値，標準偏差，t 検定

	過去と現在		過去と未来		現在と未来	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
保健室登校群８名	5.360	1.967	8.288	1.589	5.225	2.196
教室登校群25名	3.209	2.178	6.253	3.693	4.232	2.791
t 値（df=31）	2.483		1.502		0.916	
p 値	0.019		0.143		0.367	
効果量 d	1.008		0.610		0.372	

以上の結果より，保健室登校群と教室登校群とは，過去現在未来を表す３つの円の面積や，円の中心座標，周長に，有意差は認められなかった。また３つの円の面積全体に対する各時間を表す円の面積の比率，さらに各時間同士の円の面積間の比率に，両群間の有意差は認められなかった。また保健室登校群は，３つの時間を表す円にいずれも重なりを描かず，単独で３円を描き，時間の関連性を示す円の交差をどの関係においても描いていなかった。

しかし，過去と現在の円の中心点間距離に両群間の有意差が認められた。保健室登校群は教室登校群よりも，過去と現在の円を離して描いたことが明らかになった。

以上より，３つの円が示す過去現在未来の描き方については，円の面積や中心点座標，周長には，保健室登校群と教室登校群に有意差は無かった。また保健室登校群は３つの円を単独に描き，交差も描かなかったが，教室登校群は交差を描いていた。

過去現在未来の３つの時間を表す３円が分離して描かれるよりも，円の重なりや接点が描かれる場合は，時間の統合度や関連性が高いことが示されている（例，日潟，2008：白井，1996）。本結果も，保健室登校群は教室登校群と比べると，各時間が独立して描かれており，時間的関連性や統合性が見られないことが支持された。さらに，過去と現在の円の中心点間距離において，保健室登校群の方が教室登校群よりも，２つの円をより離して描いており，時間的展望について過去と現在を関連させずに，距離を離して位置づけていることが明らか

にされた。

サークル・テストの３つの円の画像解析の結果から，保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望の特徴が認められた。保健室登校群と教室登校群は，円の面積や周長，円の面積比などに有意差がみられなかったことから，これらの指標を基にすると，３円が表す過去現在未来の描き方は同じであることが示された。小野村・須永・和田（2024）も保健室登校群と教室登校群は，過去展望と未来展望に差がみられないことを示しており，本結果を一部支持している。

また保健室登校群は教室登校群とは異なり，時間的展望の３つの時間を独立して描き，時間の統合の不十分さを示唆している。しかし，保健室登校群が過去と現在をより離して描いたことは，過去を受け入れたと解釈するのか，それとも過去を受け入れるかどうかとは無関係に，過去を現在と切り離してとらえようとしているのか。

例えば樹木画テストの１つのバウムテスト（コッホ K. 1957：岸本・中島・宮崎訳，2010）は，白紙に１本の実のなる木を自由に描く，というサークル・テストと同様の投影法の心理テストの１種類である。そして，描かれた木の形やその位置などについて分析をして評価する。最近，この描画テストの１つであるバウムテストの分析に，描かれた木の画像解析を行い，その分析結果に対する臨床心理学的解釈も試みられている（高崎・竹村・岩満，2005：岩満他，2013：川杉他，2020）。

確かにサークル・テストに描かれた３つの時間を示す３つの円の画像解析から，保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について，本研究結果から新たな知見が得られた。しかし，サークル・テストの定量的解析の結果の解釈には，時間的展望についての他の測定結果も加えて，本研究結果の考察が必要である。

総合考察

第１節　過去と未来を通して見る現在

石川（2017）は，過去のとらえ方を重視した時間的展望の構築の重要性を指

摘した。そして，大学生を対象として時間的展望と精神的回復力との関係を明らかにしている。精神的回復力については，「困難状況において苦痛に感じながらも，その後の適応的な回復を導く心理的な特性および能力」（小塩・中谷・金子，2002）と定義され，「肯定的な未来指向，新奇性の追求，感情調整の３要因から構成される」という。

石川（2017）は，過去を連続的にとらえて，過去へ受容的態度であると，新奇性追求と正の相関が認められた。また感情調整は，過去を割り切り，現在と連続的であると考えると正の相関が認められ，肯定的に未来へ指向することとの正の相関が見られた。しかし，過去に否定的な態度の時には，感情調整との負の相関が認められた。つまり，過去を割り切り，過去を否定しないで受容的態度をとることで，過去，現在，未来を連続して捉えて，精神的回復力を増しながら肯定的な未来指向が可能となることが示された。しかし，石川（2017）は，過去のとらえ方と肯定的に未来への指向ができることの因果関係については，明らかにしていない。

もちろん未来に価値を置いて肯定的な未来展望を形成できるならば，希望や自己効力感，自尊感情も高まり，精神的健康も高くなることが予想される。山本（2008）や伊藤（2013）の結果も，不登校の生徒の回復過程において未来展望がより肯定的になることを示している。不登校と保健室登校の高校生の時間的展望について，本研究結果だけでは，直接比較することはできないが，不登校と保健室登校の間では，時間的展望の特徴が異なることが示唆される。

さらに和田（2019）が指摘するように，未来に価値を置き，未来を志向して，肯定的な未来展望であったとしても，必ずしも精神的健康を促進するとは限らない。

日潟・齋藤（2007）は，高校生では未来にのみ肯定的な態度を示すと精神的健康度が低いことを指摘している。また日潟（2008）によると，高校生はサークル・テストに描かれた未来優位性が必ずしも精神的健康とは関連していなかった。

本研究結果からは，保健室登校群が過去，現在，未来を単独にとらえており，

過去と現在を離して位置付けていること，面積や周長，中心点の座標軸の位置を指標とした分析からは，保健室登校群も教室登校群も差がみられないことが明らかになった。しかし本研究結果のサークル・テストの定量的解析結果から明らかにされたことと，従来の評価指標からの解釈との関連性については，今後の課題となる。

さらに和田・小野村・須永（2023）や小野村・須永・和田（2024）が示すように，自尊感情やストレス反応等の精神的健康に関連する要因と，時間的展望との関係を加えて，本研究結果に表れる保健室登校群の時間的展望の特徴を検討する必要がある。

第 2 節　保健室登校の高校生への支援

小野村・須永・和田（2024）は，高校での保健室登校群は，中学で登校に困難が無かった高校生群と比べると，身体と感情にストレス反応がより高く，また承認欲求や登校回避感情がより高いことを明らかにした。特に承認欲求は，対人関係に関するスキルと負の関係が示されている。つまり承認欲求が高いにもかかわらず，対人スキルが低いために，承認欲求を満たすだけの対人スキルをもって対人関係を構築することができていないことが示唆されたのである。

山本（2008）や和田・小野村・須永（2023），小野村・須永・和田（2024）は，親が自分をどれ程理解してくれているかという認知が，過去展望と現在展望へ直接影響しており，また自尊感情へも影響することを示した。さらに和田・小野村・須永（2023），小野村・須永・和田（2024）によると，対人スキルと承認欲求がそれぞれ親の理解認知と正の相関関係が有り，親の理解が少ないという認知が直接的に本人の身体的ストレス反応を高めることが示された。

和田（2019）は，時間的展望と精神的健康を考える視点として，他者の存在の重要性を指摘している。白井（2008）は，「他者とのかかわりにより，過去が過去化され未来が立ち上がる。過去と未来に向き合うことで生きられる現在が作られる。他者との一体感が時間を止めるが，そこで育まれる安心感に支えられることにより未来に向かい過去を過去化して時間が流れる」（p.69）という。

親のサポート要因を加えて，時間的展望を通した精神的健康への支援は，学校適応という視点からも今後の課題となる（大対・大竹・松見，2007：渡邊，2020）。

保健室登校は，教室で授業を受けたり活動をすることには困難が有るが，学校という場所に居ることは可能であり，その点が不登校とは大きく異なる。和田（2019）は，「時空間の場の変化に応じながら，変化と安定のゆらぎの中にある自己の有り様こそが現在を拡げることに繋がり，その揺らぎの中で変化する過程にこそ時間的展望と精神的健康を考える必要が出現するのであろう」（p.16）と述べている。保健室登校の生徒は，学校という場所の中での「保健室」という時空間に自分を置くことで，まさに自己と時間の「揺らぎ」の中にいるのではないか。そして山本（2008）が指摘する様に，その「揺らぎ」の中で「時間の葛藤」が生じて，その葛藤の解決から安定へと向かう過程に保健室という時間と空間を必要としているのではないか。

保健室には，「学校」に流れる時間とは異なる時間が存在する。その異次元の時間と空間の中で，保健室登校の高校生は，過去を過去として独立させて，現在と過去との距離を置き，未来を見ようとしているのではないか。しかしその時間的展望の意識化が，逆に時間の葛藤を生じさせているのではないか。未来に逃避するのではなく，過去と未来を通して現在を展望することで，現在の拡がりも得られるのではないだろうか。

第３節　本研究の限界と今後の課題

本研究は，調査対象を，「（現在，）保健室登校の高校生」と「（現在，）教室登校の高校生」として，その時間的展望の特徴を比較しながら，時間的展望の認知的側面と機能的側面の両側面に焦点をあてて，精神的健康の支援や促進を検討した。

対象となった生徒の中には，過去に保健室登校や不登校を経験した生徒や，将来多様な登校が必要となる生徒も存在するだろうが，今回は調査をしていない。また，比較検討する登校の状況として，上記２つの登校の状況以外に，不登校の検討が考えられる。しかし本研究では調査対象としておらず，直接に比

較考察することができなかった。

さらに本研究では，時間的展望を１回の時点でしか調査しておらず，個人の登校の状況の変化と時間的展望の変化を検討することができてはいない。

すでに保坂（2002）も指摘するように，登校の状況は多様であり，個人の登校の状況も変化する可能性がある。すると，本研究で検討した２つの登校の状況，つまり保健室登校と教室登校の比較だけではなく，多様な状況の中での時間的展望の特徴とその比較が必要となる。さらに，佐藤他（2023）が明らかにしたように，生徒個人の登校の状況の多様性とその変化に応じた精神的健康の促進と支援が必要となる。

本研究のこの様な限界について，登校の状況そのものの多様性の中での時間的展望の特徴の抽出とその比較，さらに生徒個人の登校状況の変化に応じながら，時間的展望を通した精神的健康の促進と支援の検討が，今後の課題となる。

引　用　文　献

千島雄太（2021）．時間的展望　小塩真司（編）非認知能力（p.115-132）北大路書房

コッホ, K.（1957）．バウムテスト：心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究　カール・コッホ著；岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳　2010，誠信書房

Cottle, J.（1967）．The Circles Test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. Journal of Projective Techniques & Personality Assessment, 31（5）, 58-71. https://doi.org/10.1080/0091651X.1967.10120417 2024年８月11日参照

日潟淳子・齋藤誠一（2007）．青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連　発達心理学研究，18, 2, p.109-119.　https://doi.org/10.11201/jjdp.18.109

日潟淳子（2008）．高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討―時間的態度代精神的健康との関連から―　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，1, 2, p.11-16.　https://doi.org/10.24546/80060019

保坂亨（2020）．不登校をめぐる歴史・現状・課題　教育心理学年報，41, p.157-169. https://doi.org/10.5926/arepj1962.41.0_157

石川茜恵（2017）．青年期後期における過去のとらえ方と精神的回復力の関連　立正大学社会福祉学部紀要，31, p.1-10.　http://hdl.handle.net/11266/6354

伊藤美奈子（2013）．不登校経験者の「過去」「現在」「未来」―チャレンジ高校に在籍する生徒を対象とした調査より―　慶應義塾大学教職課程センター年報, 20, p.113-128.

岩満優美，竹村和久，松村治，王雨晗，延藤麻子，小平明子，轟純一，轟慶子（2013）．

精神障害患者の描画とその画像解析：テクスチャー解析，フーリエ解析，特異値分解を用いて　知能と情報　25, 2, p.651-658.　https://doi.org/10.3156/jsoft.25.651
勝俣暎史（1995）．時間的展望の概念と構造　熊本大学教育学部紀要 人文科学，44, p.307-318.　http://hdl.handle.net/2298/1047
川杉桂太・竹村和久・岩満優美・西澤さくら・塚本康之・延藤麻子・小平明子・轟純一・轟慶子（2020）．統合失調症患者による臨床描画のファジイエッジ推論による分析　人間環境学研究，18, 1, p.63-71.　https://doi.org/10.4189/shes.18.63
レヴィン, K.（1942）．末永俊郎訳（1966）．社会的葛藤の解決　グループ・ダイナミックス論文集　創元新社
レヴィン, K.（1943）．猪俣 佐登留訳（1979）．社会科学における場の理論　誠信書房
Mohammed, S.M., & Marhefka, J.T.（2020）．How have we, do we, and will we measure time perspective? A review of methodological and measurement issues. Journal of Organizational Behavior, 41, p.276-293. https://doi.org/10.1002/job.2414
松田文子・調枝考治（1996）．序章　現代のアウグスティヌス　松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編　心理的時間　北大路書房，p.1-27.
三浦耕太・塚田祐基（2016）．ImageJ で始める生物画像解析　学研メディカル秀潤社
文部科学省（2023）．令和４年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について　https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf　2024年８月11日参照
小野村樹美・須永範明・和田万紀（2024）．中学の登校傾向が高校入学時の時間的展望と精神的健康に与える影響 ―中学登校群の高校適応促進要因―　応用心理学研究 49, 3, p.236-237.　https://doi.org/10.24651/oushinken.49.3_236
大対香奈子・大竹恵子・松見淳子（2007）．学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み　教育心理学研究　55, 1, p.135-151.　https://doi.org/10.5926/jjep1953.55.1_135
小塩真司・中谷素之・金子一史（2002）．ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 ―精神的回復力尺度の作成―　カウンセリング研究，35, 1, p.57-65.
小塩真司（2021）．非認知能力　―概念・測定と教育の可能性―　北大路書房 「終章」p.253-260.
佐藤主馬・宮川拓人・末吉彩香・柘植雅義（2023）．不登校に関する研究の主題とその動向 ―過去30年間の文献に対するテキストマイニングを用いた検討―　障害科学研究，47, p.13-24.　https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/2006868
Shigemune, Y., Saito, S., Hiromitsu, K., Hamamoto, K., Ochi, R., Shinoura, N., Yamada, R., & Midorikawa, A.（2021）．Depression and time perspective in patients with brain tumors: Novel measurements in the circle test.　Journal of Affective Disorders Reports, 4, https://doi.org/10.1016/j.jadr.2021.100084
白井利明（1994）．時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究　65, 1, p.54-60. https://doi.org/10.4992/jjpsy.65.54

白井利明（1995）．時間的展望と動機づけ ―未来が行動を動機づけるのか―　心理学評論　38, 2, p.194-213.　https://doi.org/10.24602/sjpr.38.2_194

白井利明（1996）．第７章第１節　時間的展望とは何か　松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編　心理的時間　北大路書房, p.377-442.

白井利明（2008）．自己と時間 ―時間はなぜ流れるのか―　心理学評論，51, 1, p.64-75. https://doi.org/10.24602/sjpr.51.1_64

園田直子（2011）．時間的展望を形成する方法としての「展望地図法」の開発とその効果の検討　久留米大学心理学研究，10, p.22-30.　http://hdl.handle.net/11316/438

鈴木美樹江（2017）．高校生における不適応徴候と不登校傾向および登校状況との関連　人間と環境　8, p.29-36.　https://doi.org/10.24648/uheok.8.0_29

高崎いゆき・竹村和久・岩満優美（2005）．描画から「心理」を解釈する ―樹木テストの画像解析と臨床心理学的解釈―　感性工学研究論文集　5, 3, p.155-164.　https://doi.org/10.5057/jjske2001.5.3_155

都筑学（1982）．時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究　30, 1, p.73-86. https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1_73

都筑学（2009）．中学校から高校への学校移行と時間的展望 ―縦断的調査にもとづく検討―　ナカニシヤ出版

渡邉仁（2020）．高校における学校適応研究の過去10年の動向と課題　北海道大学大学院教育学研究院紀要，137, p.1-30.　https://doi.org/10.14943/b.edu.137.1

Wada, M.（2021）. SELF AND TIME – An Asian perspective on cultural Psychology – From the Era of National identity to the Era of the Asian Community that Citizenship Creates. Lecture Paper Collection 2020-2021. p.95-109. Bangkok University International Donation Course Supported by Eurasia Foundation from Asia（formerly One Asia Foundation）.

和田万紀（2019）．時間的展望と精神的健康 ―過去，現在，未来から立ち現れる「現在の拡がり」―　桜文論叢　100, p.1-22.

和田万紀・小野村樹美・須永範明（2023）．高校入学時の時間的展望と精神的健康が登校回避感情に与える影響 ―高校入学時オリエンテーションでの調査より―　日本応用心理学会第89回大会（亜細亜大学）発表論文集　1A-3

和田万紀・小野村樹美・須永範明（2024）．保健室登校の高校生の時間的展望の特徴 ―サークル・テストによる分析―　日本応用心理学会第90回大会（帝塚山大学）発表論文集　2D-16, p.97.

山本奬（2008）．時間的展望の変化に見る不登校の経過・回復過程 ―高校生事例による検討―　心理臨床学研究，26, p.290-301.